
Maze without walls

神薙慚愧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a z e w i t h o u t w a l l s

【Nコード】

N 5 7 2 5 N

【作者名】

神薙慚愧

【あらすじ】

プログラムを自分専用のデバイス組み込み魔法を使う、そんな世界（Another world）

その世界にある一つだけの街「キュアソウル」

そこは、思い出を失くした人が流れ着く街

たまにプログラムのバグやウイルスが具現化しモンスターとなって人々に襲いかかる。

それを退治するのが「バスター」

最初は、「軍」が退治していたが、対応が遅い等で、

そこらのバウンティハンターにモンスターに賞金をつけ退治させることにした。

最近、行方不明になる人が増えてきた。またモンスターもまた増えてきた。

そんなとき新しくこの街へ迷い込んだ者が一人現れた。

ゝルールブックゝ

ゝゲームルールゝ

その一、死ぬまで生きる

その二、迷いを断ち切れ

その三、敷かれたレールに沿って歩むな。

その四、集めて、見つけて、深めて、共に走り出せ。

その五、天国もなければ地獄もない、そう思え

それを守らなくば、死あるのみ

これは壁のない迷路、入口もなければ出口もない

標識もなければトラップもない

階段もなければ橋もない

そこにあるのはただ広い空間とあなたの失くした大切なもの。

待ち受けるのは罪と罰

あなたを襲い追いつめる。

脱出のカギはあなた自身が知っている。

そんな迷宮に迷い込んだらあなたは脱出できる？

ゝルールブックゝ（後書き）

構想中の小説その二

タイトルの意味は壁のない迷宮

テーマは「生き甲斐」と「絆」です。

なんかのアニメとかぶっていいそうだが気にしない。

「1 - 0 & a m p . 1」

「0」

道に迷ったというのは現在位置がわからない状態のことを言う

「1」

「う、うゝん、ここは、どこだ」

目覚めるとそこはモノトーンの世界、いやモノクロ調の家具で囲まれた部屋だった。

ソファに寝転がっていたところから眼が覚めたようだ。

何故ここにいるのか、まったく思い出せない。

そこへぴぴっ、とどこからだ着信音になる。

「ん？」

見渡すと着信音とともにテーブルの上でぶるぶる震えているケータイを見つける。

ケータイはタッチパネル式でフォルムも黒で統一されている。

ぱかっと開き、ぼちぼちと操作をする。

メールが来ていたようだ。

内容はこのようである。

《ようこそ、「キュアソウル」へ、あなたはこの街で新たな人生を歩むことができるでしょう。その部屋は新たな人生を歩むための拠点となります。つまりあなたの家です》

ここまで読んだところであたりを見回す。

「「キュアソウル」？聞いたこともない街だな、なんか新しく出来た都市なのか？それにこの部屋は俺の物？不気味なほど気前がよすぎるな」

様々な疑問が過るが続きを読む。

《この街は十三の区域に分かれていてそれぞれ区長が統括しております。また治安は、「ファイヤーウォール」が街の警備をしております。また生活資金は、毎日一定額あなたの口座に支払われます。一定額以上貯金した場合、それ以上は支払われないので自分で働くなりして稼いでください。物を買うときなどの支払いはずべてテーブルの上にあるカードで支払うことができます。》

そこまで読んだところで、テーブルの上にあったカードを見つける。これもまた黒色のカードである。おそらくICカードの類だと思われる。

ご丁寧にカードには“レイン＝フォールハルト”と自分の名前が刻みこんであつた。

ご紹介が遅れました。俺はレイン＝フォールハルトという者です。今現在、状況説明中なのでしばしお待ちを

「「ファイヤーウォール」？ウイルスセキュリティですか？まあネーミングはともかくやけにサポートがしっかりしているな怖いくらいに」

どういう年金制度？

ともかくお金にはある程度は不自由しないみたいだ。

《病院などの医療施設はほとんどありません》

「は、怪我したときどうすんのよ。」

理由はこの後に書いてあつた。

《街全体に特殊な結界が張られており怪我や病気はしません》

滅茶苦茶だ。

ファンタジーにも程がある。

《またこの街では、自分でプログラミングしたプログラムを専用のデバイスなどで魔法として使うことができます。プログラミングは自宅にあるパソコンで行えます。デバイスは後ほど届きますのでお楽しみにしてください。》

納得した。

ここは、そつだ科学技術が発展しているのだ。

そうに、違いない。

《では新たなひと時を心の行くままにお過ごしください》
文章はここで終わっていた。

「なんとも不思議なところだ」

ともかく忘れた思い出を思い出すまで暮らすことになるだろう
まずはこの街を探索すると思いますか。

レインは、リビングから玄関へと向かう。

玄関には、いままで自分が使っていたブーツが置いてあった。
ブーツをはきベルトであくせくして留める。

準備完了、いざ外の世界へ

ドアノブに手をかけ勢いよくドアを引く
がきつ

「あれ？」

ドアが開かない

ガチャガチャやっても開かない。

「閉じ込められている!？」

途方にくれそうになる。

その時ぶるぶるっとケータイが震える。

どうやらまたメールが来たみたいだ。

《ちなみに、デバイスが届くまでは外出はできませんのでそこら辺
はご了承ください》

見透かされているような文章

監視でもされているのか？

そんなことはどうでもいい

今ある問題は、

「俺の苦勞を返せっ!!」

せっかく難しい靴を履いたのに（これしか履く物がない）これでは
骨折り損だ。

く1・0&mp・い）（後書き）

この物語はバトルも踏まえながら、ミステリー系で行きたいと思
います。

いままで一番出来がいいと自負している。

次の日、デバイスが届いた。

同時にドアのロックが解除される。

レインは眠気を振り払いながらそれを受け取る。

なぜこんなに眠いかと言うと、まあ話せばいささか長くなる。

昨日一日は暇だった。

暇すぎたのでパソコンを開き、この街の事を細かに調べておいた。

街のシステムのこと、この家はどこにあるのかなどについて知っておくべき知識はある程度、頭に詰めておいた。

この部屋はマンションにあるらしい。

かなり高いマンションらしく、この部屋は12035階の5号室らしい。

最初、気晴らしに窓開けてみたら雲海が見えてビビったよ。

ついでにここでのスポーツのことも調べてみたら半端じゃなかった。

武器を用いた格闘技である。

武器は魔法で作ったものを使用する。

ルールは、どちらかが倒れるまでやる「デスマッチ」

時間制限内でどちらがより多くのダメージを与えたか競う「ポイント」

など様々である。

「ふむ、面白そうだな」

「戦国最強」と名乗る本多勝政や「紅蓮決槍」真田風蓮、「静風削石」風魔清香、「蒼氷斬刀」伊達零と四天王と呼ばれる猛者も存在するらしい。

どんな奴らだよ。

まず最初に、出られたらスタジアムの方に顔を出して見よう。

他にはこの街に住むには何かしら護身用の武器の魔法を組み込まな

ければならぬらしい。

どうも、バグやウイルスが具現化して人々を襲うらしい。襲われた人間は、一定値以上のダメージをくらうと、消されるらしい。

めったには出ないので心配しないでいいそうだが、あまり知りたくなかった。

そういうわけで護身用の武器をデバイスが来るまで自分で組んでみることにしたのだ。

パソコンを立ち上げプログラミングツールを開く

いろいろサンプルがあり、初心者にも簡単にプログラミングができる使用になっていた。

武器作成の一覧を開き早速作成に取り掛かる。

武器の形状や属性、仕掛けなども自分で決めることができる。

まずはサンプルを選びそこから自分なりのアレンジを加える。

レインが選んだのは片手で扱えるショートソード

どんな形にしようか迷いつつもいろいろいじっていく

最終的には鉈みたいな形になってしまったが気にしない。

属性は日、月、火、水、木、金、土で分けられていた。

どう見ても曜日なのだがツツコミはなしの方向で。

レインは水属性にしておいた。

選んだ理由はとくにない。

これでひとまずは完成した。

最後に出来上がったものを具現化してみる。

パソコンにデバイスのような機能が付いていてテストをすることができる。

ツールの「TEST」というボタンをクリックし具現化させる。

ぱつと剣が出現する。

透き通る流れる水のイメージをした剣

我ながらいい出来だ。

ひとまずは武器ができたので他にも作ってみようということにして

みたのだが

装備の欄に「防具」「サブ」

「戦闘魔法」の欄に「攻撃」「防御」「補助」

「生活」の欄には「料理」などといった、あらゆる分野の魔法が作ることができ無謀にもそれらすべていじくりまわそうと挑んでしまった。

その結果が睡眠不足といった形で反撃してきたのだ。

とりあえずデバイスと家のカギを手に入れることができた。

デバイスは腕輪型で取り外しが可能であった。

デバイスに作った魔法をインストールしていざ出発

入れたデータはサンプルにあった「マップ」に「倉庫」自分で作った「武器」と「攻撃魔法」

「攻撃魔法」は今のところ水弾を発射する程度だがいまはこれだけで十分だろう。

ケータイに財布も魔法でいつでも別の空間から出し入れ可能にしてある。

部屋の電気も消した。鍵もかけた。

では出発。

ドアを開き外へ出る。

家を出るとそこにはちょっとした広場が広がっていた。

中央にエレベーターが通っていてそれを囲むように部屋が円卓状に九つあった。

「どうしようか」

まずはお隣さんに挨拶を済まそう。

だがただ今現在外出中のようでした。反対側も同じく。

この階の部屋すべてまわったがすべて留守。

「はあ………」

深いため息をつかざるを得ない。

挨拶は手土産とともにした方がよいだろう。

お金足りるかな。

「ともかく探索、探索」

時間は限られているんだ。こんなところで油に火つけてないでさっさと行こう。

違った油を売っていないで、だ。

エレベーターのボタンを押し来るのを待つ。

するとすぐさまエレベーターは来た。

「速いな」

驚きとともに少しの不安が過る。

速すぎると重力が半端ないのでは？

そんな心配をしつつ下界へと続くエレベーターに乗り込んだ。

ゝ112ゝ（後書き）

ギャグ展開がなかなか出ない。

まあともかく最初は始めたばかりのネットゲーでもやっているような
雰囲気を出したい。

「えらい時間かかったな、15分くらい、意外と不便だなこのマンション」

エレベーターを何度も乗り換えてやっと一階までたどり着くことができた。

後に知ることになるのだが、このマンションには小区間エレベーターと中区間エレベーターがあり電車と言う各駅停車と快速電車みたいなものがある。

レインは各駅で終点まで来てしまったことになる。

そりゃ時間がかかるわけである。

外へ出るとそこはただ広い公園だった。

公園の中では色々な人が遊んでいて何の違和感もない

ケータイのナビによると第六地区、「居住区」で周りが水に囲まれている。

他の地区に行くには電車か車でしか行けず徒歩でも行けるが命にかかわるらしい。

とりあえず第七地区の「商業区」に行きたいので駅を地図で探す。すると駅は今さっき出てきたマンションの地下にあるらしい。

「またエレベーターですか……」

何回、乗らなきゃいけないんだ。

とりあえず、あとでテレポート魔法をプログラミングしようと決めたレインであった。

「1-3」(後書き)

オンラインゲームでは、一番面倒なのがLv上げと移動なんですよ。
ね。

クエスト達成するのにワールドの端から端まで行かされた時は
もう大変でしたよ。

道中、強敵が立ちふさがっていた割にはクエストが初心者用だった
りね。

柳生ケイセイは街の中を鼻歌交じりで歩いていた。
「どうか走っていた。」

魔法で身体能力を上げて道路を高速で走っている。

彼もこの街に来てからまだ4ヶ月ぐらしかたっていないがこの街の暮らしにはだいたい慣れてきた。

最初のころはここはどこなのか、なんでここに連れてこられたのか色々戸惑いや不安があった。

それでも同じ階の部屋の隣や近所の方々に助けてもらいながら、なんとか自立できるようにまでなった。

そして今日、また新しく仲間が来るというのだ。

「というか今日が開放日、ご対面ということとなる。」

そんなわけで、いろいろと歓迎パーティーの為に必要なものを取りそろえて家に戻っているわけだ。

ケーキやプレゼントはお隣さんのノラさんや羽真さんや葉水ちゃんに頼んである。

フィニアちゃんは家でまだ寝ているだろう。

戻ったらさっそく手伝ってもらおうか。

早くしないと新しい仲間が外へ出て行ってしまう。

ケイセイの作戦は部屋から出てきたところを驚かせるつもりなのだ。基本、同じ階の住人は皆、家族同然の付き合いをしている。

ここに来た時は、誰しも不安や恐怖といった感情が襲ってくる。

だが、それを同じ階の住人が助けてあげる。

ここに住む街の住人はそれを暗黙の了解でやっているのだ。

きっと不安で怯えているかもしれない。

だからケイセイは自分にしてくれた優しさを新しい仲間伝えたいのだ。

「よっしゃあ！！そう思ってくるとみなぎってきた！！」

買い物袋が空気摩擦ですり減っていることも気づかず爆走する。

く 1 - 4 く (後書き)

NEWキャラ

柳生ケイセイです。

ほのぼのな雰囲気をつまく出せるようにしたい。

「むう」

目覚めたばかりの固まった体を伸ばしフィニアはベッドから起き上がる。

フィニア「シュラインはとてもお寝坊さんである。

そして体があまり頑丈ではないので、車椅子生活なのである。

そのため重度のめんどくさがり屋で行動範囲はかなり狭い。

大抵のことはパソコンを通じて済ましてしまい空いた時間を昼寝や読書に費やしている。

この街に来てから一年くらいたったがいまだに街の正体はつかめていない。

ネット上でアバターを用いた新たなチャットシステム「アマミズ」を開発してからバンバンとお金が入るようになった。

彼女は病弱ゆえに人同士のつながりを誰よりも大事にする。

最初に来た時、足が不自由で何もできなかった。

そんな彼女を助けてくれたのがこの階の住人だった。

七人の住人たちが部屋にやってきてあれこれ世話をしてくれた。

この街に暮らすためのいろはを教えてくれ、車椅子まで用意してくれた。

なぜここまでしてくれるのか

最初は戸惑いを覚えたがそれでも彼らの優しさに心を惹かれた。

だから今日開かれる歓迎パーティーのため行動に出ようと体を捻りベツドのサイドテーブルに置かれた目ざまし時計を見る。

「今何時だ？おわつ、もうこんな時間！！」

行動に移す時間が一時間ほど遅かったらしい。

皆、もう準備とかしていることだろう。

フィニアは慌てて飛び起きあらかじめ用意しておいた服に着替え始める。

といつても着替えるのにひと手間かかるので、魔法少女の変身みたいに魔法で着替えを済ましてしまう。

腕時計型のデバイスをばちばちと操作し魔法を起動させる。

フィニアの周りに魔法陣が展開され光に包まれる。

そして発光が終わるとそこにはジャージ姿のフィニアがいる。

このお着替え魔法は自前の物である。

わざわざ発光させる必要はないのだが、プライバシーの関係上そうせざるを得ない。

衣装を選べばあつという間に着替えることができる。

ゆえに今着ている服は高度な幻術魔法みたいなものでわずかながらも発生源のデバイスのバッテリーを消費し続ける。

バッテリーが切れた時にはあら、大変。

一回、街中でうっかり充電し忘れて切らしてしまったことがある。

その時には、付き添いの女の子に助けてもらったのを覚えている。

電動車椅子を呼び寄せよつこらせつと補助なしで乗り込む。

「もうゝなんでこんな日に限って（時計が）寝坊するのよー」

ぶちぶち愚痴を垂れつつも仕事机に向かう。

フィニアの担当は、演出効果魔法のプログラミングである。

ミラーボールからスポットライト、花火まで出来てしまう。

カタカタとキーボードを高速で打ち作成していく。

ツールでも使えばある程度の物ができるがこだわり性のフィニアはそうしない

自前のプログラムソフトを使いバンバンと作っていく。

パーティ会場は各階にある「リビング」と呼ばれる広間で行う。

そこに合う演出方法をどんどん編み出していく。

そして演出プログラムを書き終えふと思う。

「果たしてこれでいいのかしら？」

はつきり言つと彼女は自分のセンスに自信がない。

派手にやろうと思つたら、他人からやり過ぎと言われ

おとなしめにやろうと思つたら、他人から物足りないといわれる。

「にゃーどうしましょ」

頭を抱えもだえる。

その前に広がる画面からは、あからさまに危なそうな演出だった。

ゝ 1 - 5 〉 (後書き)

またまたNEWキャラ

フィニア〃シュラインです。

とくに元ネタはない

あと6人ほどかな出てないキャラは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5725n/>

Maze without walls

2011年10月7日19時00分発行